

卒業論文

題目：教育から見るタンジマート時代のオスマン帝国の様相

東京外国語大学 外国語学部

南西アジア課程トルコ語科 4 年 地域・国際コース

澤村 華奈

指導教官：新井政美教官

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1. タンジマート (Tanzimat) とオスマン帝国	
2. 問題の所在と先行研究	
第1章 オスマン政府による教育改革・・・・・・・・	6
1. タンジマート以前の公教育の状況	
2. タンジマート時代の教育改革	
(a) 教育行政の発展—タンジマート時代前半 (改革勅令以前) —	
(b) 教育改革の完成—タンジマート時代後半 (改革勅令以後) —	
第2章 新オスマン人の教育観・・・・・・・・	16
1. アリー・スアーヴィ	
2. ナームク・ケマル	
終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・	22
参考文献一覧	

はじめに

1. タンジマート (Tanzimat) とオスマン帝国

オスマン帝国は、13 世紀末から 20 世紀初頭まで非常に長期間にわたって存続した国家であり、その支配地域は、バルカンから西アジアそして北アフリカに広がる東地中海全域に及んでいた。そこでは、イスラムが支配者の宗教として絶対的な優位に置かれており、多民族、多宗教の人々も多く内包する「イスラム国家」としての統合体制が敷かれていた。しかし、19 世紀半ばのタンジマートに代表される一連の近代化政策を経験し、1923 年オスマン帝国は解体しトルコ民族からなる「国民国家」としてのトルコ共和国が成立した。

タンジマート時代とは、一般に 1839 年のギュルハーネ勅令発布から 1876 年のミドハト憲法制定までの期間をいう。西欧諸国によるオスマン帝国の改革への圧力に対応する形で近代化政策が推進されていく。ギュルハーネ勅令発布の翌年から具体的な改革が実施され始め、1856 年に出される改革勅令がそれらの改革を一層進めさせた。

タンジマート時代の改革路線は、中央集権化された官僚機構と近代的な軍隊を持ち、法の力によって中央政府が影響力を持つ近代的な国家になることであった。¹例えば、地方行政・税制の分野では、徴税請負制が廃止され中央からの徴税官が直接赴き地方の行政と資産税の査定が行われた。このことは、政府が住民一人一人を、国家を構成する単位として把握しようとし始めたことを意味していると評価されている。²また、ヨーロッパの法を模して刑法や商法が整えられた。教育の分野では、公教育の普及が目指された。例えば、1868 年には初等教育が義務、かつ無償であることが公表された。翌 69 年には全国の街区、村レヴェルの小学校、町レヴェルの高等小学校、都市レヴェルの中学校、州都レヴェルの高等学校、さらにはイスタンブールの大学にいたる教育機関の整備計画を記した国民教育綱領が発表されている。³

ところで、1840 年半ば頃までにオスマン帝国市場はヨーロッパ資本主義のもとに開放されており、ヨーロッパ製品の流入はかつて繁栄していた土着の産業を衰退させていた。一方で、外国語を解し地中海地域に商業ネットワークを持っていたギリシア人、アルメニア人、ユダヤ人などの非ムスリム商人はムスリム商人に比べて有利な立場に立つことがあった。また、民衆が経済的に困窮しているにもかかわらず、宮廷ではスルタンやその一族により浪費が続けられていた。このような状況を背景に、タンジマートの改革に異議を唱える人々が現れた。「新オスマン人」と呼ばれる若い知識人グループである。彼らは、主にスルタンの浪費と専制、列強の干渉、関税自主権の喪失による民衆の経済的困窮を批判し、立憲政の実現を追求し、新聞を発行し政府批判の論説を発表した。

タンジマート時代は、スルタン・アブデュルアジズを退位させたクーデター、新オスマン人らとも交流のあった皇太子ムラト 5 世の即位と廃位、アブデュルハミト 2 世の即位を

¹ 永田 2002、293 頁

² 新井 2001、59 頁

³ 新井 2001、66 頁

経て、1876 年憲法発布により幕を下ろし、オスマン帝国はその歴史の新たな段階に入っていく。

2. 問題の所在と先行研究

本稿では、以上のようなタンジマート時代の改革とそれに対する新オスマン人の言説に注目することで、オスマン帝国において目指された近代化の実体を明らかにし、それがその後のオスマン帝国の変革にいかなる道筋を与えることになったのかを検証したい。そのためにはタンジマートの諸改革のうち、教育改革に着目し検証することが有効な手段の一つだと考える。

教育改革は、近代的な官僚養成ための行政学院(Mekteb-i Mülkiye)や西洋の事情に触れオスマン帝国の西洋化を指導しうる人材を養成するガラタサライ・リセ(Galatasaray Lisesi, Mekteb-i Sultani)などの官僚・エリート候補を対象にした機関の設立だけでなく、広く帝国の住民を対象とした政策も推進した。すなわち、オスマン政府は改革において中央集権化を進め、住民一人一人を把握してその教育にも責任を持とうという方針をもっていたといわれている。⁴また、例えば、バルカンなどの周辺地域においては、国家への忠誠を高める手段として高等小学校(rüşdiyye)がつくられたといわれている⁵。したがって、当時の教育改革には、近代化された国家を実現するにあたって追求された「国民像」が現れており、それは同時に、タンジマート時代の改革が目指した近代国家の姿を表わしているといえるのではないかと考える。しかし、オスマン政府によって行われた教育改革を検証するだけでは、当時のオスマン帝国の人々による近代化や西欧化への動きの内実を明らかにすることは難しい。その改革が実施された結果、オスマン帝国の社会にどのような効果や影響が現れたか、あるいは人々は改革をどのように受け止めたかを明らかにする必要があるだろう。

そもそもタンジマートの諸改革は、スムーズに進んだわけではなかった。先に述べたように、新オスマン人らによる政府批判の活動があった。新オスマン人グループは、多くがオスマン帝国の支配層の家系出身の子弟でヨーロッパ留学や翻訳局(Tercüme Odası)⁶での勤務の経験を持つ若い知識人たちからなっている。ナームク・ケマル(Namık Kemal, 1840-88)を中心に、タンジマート時代の現状を変革することを目指して 1865 年にイスタンブルにて秘密結社が組織された⁷。1867 年、彼らは、政府批判の言論のために首都

⁴ 新井 2001、82 頁

⁵ Somel 2001、11 頁

⁶ 19 世紀に入り西洋化を推進するにあたり、西洋の事情に通じた人材の育成が必要となった。しかし、オスマン帝国では、伝統的に外国語通訳の人材は専ら非ムスリム臣民から供給されており、帝国の支配者層の人々が直接西洋知識に触れることがなかった。そこで、1833 年大宰相府に翻訳局が設置され、ムスリム・トルコ系の人々が勤務し、西洋の言語や知識を習得した人材が輩出されることとなった。

⁷ 新井 2001、78 頁

から遠ざけられるという制裁を受けたために相次いでオスマン帝国を脱出し、パリおよびロンドンで運動を展開した。彼らのヨーロッパでの運動は、内部分裂や庇護者を失ったために組織としての成果はなかったが、個々人の言論活動においては大きな意義が見られる。

8

そこで今ひとつ、検証されるべきは新オスマン人らの言説である。彼らはヨーロッパの事情に触れ、「自由」「憲政」「祖国」「国民」等の概念を受容し、立憲政を通じてオスマン帝国がヨーロッパと同じレベルにまで進歩することを目指していた。では、彼らは教育に関しては、どのような意見を持っていたのだろうか。新オスマン人の論説のうち、教育について書かれたものを検証し、政府の教育改革に対して異議を唱えていたのかどうか、あるいは彼ら自身の教育観を明らかにしたい。タンジマートを推進する政府とそれを批判する新オスマン人という両者の教育についての議論を併せて考察することによって、この時代のオスマン帝国の様相を総合的に理解する第一歩となるのではないと考えるからである。さらに、そうした作業を通じて、政府やあるいは新オスマン人が、オスマン帝国の住民をどのような「国民」に導くことを目指したのかも明らかになるのではないかと考える。なぜなら公教育と「国民形成」は常に密接な関わりを持つからである。

タンジマート時代の教育改革や新オスマン人の思想については、以下のような先行研究は存在する。教育改革については、セルチュク・アクシン・ソメル氏の『オスマン帝国における公教育の近代化 1839-1908』(Selçuk Akşin Somel. *The Modernization of Public Education in the Ottoman Empire 1839-1908*. Leiden; Boston; Köln: Brill. 2001) やヤフヤ・アクユズ氏の『トルコ教育史』(Yahya Akyüz. *Türk Eğitim Tarihi (Başlangıçtan 1997'ye)* 6th ed. İstanbul: İstanbul Kültür Üniversitesi Yayınları. 1997) でタンジマート時代の教育政策を概観することができる。また、各種学校についての情報については、オスマン・エルギン氏の『トルコ教育史』(Osman Ergin. *Türk Maarif Tarihi: vols. 1-2*. İstanbul: Eser Matbaası. 1977) が利用できる。日本における研究では、佐原徹哉氏の『近代バルカン都市社会史 多元主義空間における宗教とエスニシティ』(刀水書房 2003) でオスマン政府の公教育政策について知ることができる。この著作は、バルカン地域を研究対象としているが、政府の教育改革に対する住民の対応についても言及されており、より当時の実際に迫った論稿だと思われる。一方、新オスマン人に関しては、シェリフ・マルディン氏の著作『新オスマン人の思想の起源』(Şerif Mardin. *The Genesis of Young Ottoman Thought-A Study in the Modernization of Turkish Political Ideas*. Princeton: Princeton University Press. 1962) が代表的なものとして挙げられている。日本では、ナームク・ケマルに関する論稿が存在するが⁹、それ以外の新オスマン人を取り扱った論稿は見あたらない。

これらの研究を通じて、オスマン政府や新オスマン人が近代化に対してどのように志向

⁸ 新井 2001、83 頁

⁹ 新井 1977

していたかがうことができるだろう。しかし、教育という一つの分野において、オスマン政府の政策と新オスマン人の主張の両方を検証することによりオスマン帝国の近代化の実体を明らかにしている著作は見られない。ゆえに、本稿では、上記の方法で研究を進めることとする。

第 1 章では、タンジマート時代のオスマン政府による教育改革を取り上げ、政府が教育改革においてどのような志向を持っていたのか明らかにしたい。第 2 章では、タンジマート時代の後半に、政府批判の言論活動を行った新オスマン人について取り上げる。

第1章 オスマン政府による教育改革

本章では、タンジマート時代に政府が実施した教育改革について検証する。ここでは主に前述したソメル氏の著作に依拠して、当時の教育体制を概観したい。主に注目する点は、教育行政はどのように発展したのかという点である。それを検証することで政府が目指した「国民像」を明らかにしたい。

1. タンジマート以前の公教育の状況

近代的な教育機関の設立は、人材の育成に大きな努力を払ったマフムート 2 世 (Mahmud II 1785-1836、在位 1808-39) の時代に始まる。まず、軍医学校 (Tıbhane-i Amire, Mekteb-i Tıbbiye) や軍楽隊 (Mehterhane) のための音楽学校 (Müzika-i Hümayun Mektebi)、陸軍士官学校 (Mekteb-i Ulum-i Harbiye) など、主に近代的な軍隊を支える人材養成のための学校が創設された。マフムート 2 世の最晩年になると、非軍事中等教育機関が構想され、官吏養成の学校も設立された。また、1833 年に大宰相府に翻訳局 (Bab-ı Ali Tercüme Odası) が設置される。翻訳局は、それまでギリシア人など非ムスリム臣民が外国語の通訳職を独占しているという状況を打開するために、フランス語を教える機関として設立された。そのため翻訳局には、若いムスリムの官僚が配属された。また、当時オスマン政府では近代的な初等教育システムが整っておらず、兵士や軍隊出身の官僚も基礎的な読み書き能力を身につけるために翻訳局へ入局していた。¹⁰1830 年代まで、オスマン帝国の教育機関は、ほとんどが軍事専門の教育施設に留まっていたといわれている。¹¹

また、伝統的な教育機関として政府による教育機関としては宮廷学校 (Enderun Mektebi) やイエニチェリ訓練学校 (Acemi Oğlanların Mektebi) や若い官僚が文学の技法を学ぶ政府の部局があげられる。これは、オスマン帝国の首都に設置され、オスマン・トルコ語を使って指導された。しかし、一般のムスリム臣民は入学することができず閉鎖的な教育機関であった。したがって、ムスリム臣民においては政府によってつくられた教育機関で学ぶことよりも、ウレマーが運営するムスリム・コミュニティ内のコーラン学校¹² (sıbyân mektebi) やメドレセ (medrese) へ通うということが一般的であった。コーラン学校は、政府の命令により税金で建設されるのではなく、コミュニティ内の富裕層の寄進によって建設された。また学校の名前には寄進者の名前が冠されており、政府が地域名や番

¹⁰ Somel 2001、20 頁

¹¹ Somel 2001、21 頁

¹² サヴィ (sabi) と呼ばれる 5・6 歳の子供のために建てられた最初の教育施設が、スプヤーン・メクテビ (sıbyân mektebi) と名づけられ、初等教育を行う学校を意味するようになった。この種の学校の呼び方は、他にも Darüttalim、Mektep、Mektephane などがある。また、一般の人々には、学校が各街区に一校あったことからマハレ・メクテビ (mahalle mektebi) とも呼ばれていた。(Ergin 1977、83 頁) ソメル氏は、sıbyân mektebi を Quran school と著している。これは、当時の sıbyân mektebi における教育内容がコーランの暗唱を中心に行っていたことに由来すると考えられる。本稿においても、ソメル氏の表記に従い「コーラン学校」と記述しておくこととする。

号などをつけて学校を管理することはなかった。また、子供がコーラン学校に入学する時期も決められていなかった。¹³

18 世紀頃からオスマン帝国の中央集権体制が緩んでくると、政府は、オスマン朝による支配の正統性を正統的なイスラム信仰に求める傾向を強め、イスラムが政治の道具として使われるようになった。同時に、コーラン学校も重要視されるようになった。1824/25 年には、宗教教育を強制する勅令がでている。そこでは、親たちが子どもを働かせるために 5・6 歳で学校を終えさせてしまうために宗教に関して無知に陥っていると指摘されている。そして、イスタンブルやその周辺の地域で伝統的なコーラン学校のレベルの公教育が敷かれることになった。また、より多くの子供たちをコーラン学校に通わせるために、生徒たちに衣服や食事や日当を与える政策が採られた。¹⁴

一方、宗教教育を通じて読み書きを身につけるという実目的も同時に意図された。¹⁵ それまで、コーラン学校で教えられる際には、アラビア語が使われコーランを暗唱させることが中心で、文字の読み方や書き方は教えられなかった。また、トルコ語が教えられる機会はまったくなかった。しかし、18 世紀頃から、コーラン学校での教育に文字の読み書きを取り入れようとする試みが見られる。例えば、アブデュルハミト 1 世 (Abdülhamit I 在位 1774-89) の時代には、コーラン学校の目的は、子供たちにコーランを読ませること、礼拝の手順や礼拝時に読まれるコーランや祈りの言葉を学ぶこと、少しものを書かせることの 3 点であるとされた。ここにおける書くことは書道 (kaligrafi, hat) を意図しており、日常的な文章やトルコ語の書き方は教えられなかった。¹⁶

タンジマート以前においては、多くの人々にとって教育の機会はコーラン学校に限られており、伝統的なコーラン学校が初等レベルの公教育であったといえる。一方、当時、コーラン学校は宗教的な知識を身につけるだけでなく社会訓練を施す場としても考えられており、政府はコーラン学校での教育を通じて支配体制の維持を図っていたこともうかがえる。¹⁷

しかし、近代化が推進されるなかで、コーラン学校の教育の後進性が議論されるようになり、1839 年、イスタンブルで初めて、商業や工業といった世俗的な知識の導入にも関心

¹³ Ergin 1977、88 頁

¹⁴ Ergin 1977、87-88 頁

¹⁵ Somel 2001、25 頁

¹⁶ コーラン学校では、アラビア語の文書を壁画に書かせたり書写 (kopyecilik) させたりしていた。学校の卒業生はよい壁画工や写本家になったが、短い文や手紙を書くなどの能力は身につかなかった。(Ergin 1977、86 頁)

¹⁷ 教育を社会訓練に利用することは、近代初期の絶対主義や 18 世紀のヨーロッパの啓蒙運動の中で見られる。近代初期ヨーロッパで、教会の戒律がある中、絶対主義国家が興ると、宗教的アイデンティティを強調することや宗教的信奉を強制することによって支配者の権威の拡大が図られ、人々は、従順で敬虔、勤勉な臣民であることが期待された。(Somel 2001、p.5) オスマン帝国は、1824～25 年にはセルビア・ナショナリストの活動やギリシア暴動を経験しており、そのような情勢を抑制するために、社会的な規範を人々に浸透させる必要がありコーラン学校の強化がはかられた。(Somel 2001、24 頁)

が示され、学校改革への動きが見られる。それは、1839 年 2 月の公共事業委員会(Meclis-i Umur-ı Nâfia)での記録から知ることができる。この委員会は、マフムート II 世の提案によって設置された。ここでは第一に、公教育の重要性が語られた。人々の幸福のために教育と科学(maârif ve ulûm)が重要であるとされ、同時に、宗教的知識(ulûm-ı diniyye)は死後救済されるための手段であり、それ以外の分野(fünûn-ı sâire)、すなわち世俗的な科学は「完全に調和して生きる」ためのもので並存するという。第二に、当時の学校の現状と教育問題の解決案について言及された。¹⁸同年 11 月、ギュルハーネ勅令が發布され、本格的な教育改革はタンジマート時代に引き継がれ、コーラン学校への改革や、世俗的な中等教育の整備が進められる。

2. タンジマート時代の教育改革

それまで、オスマン帝国の学校としては、圧倒的多くのウレマーによるコーラン学校やメドレセなどムスリムのための教育機関と、自治を認められた異教徒住民が設立した学校と、外国人ミッションの建てた学校などが存在していたが、政府がそれらに積極的に指導することはなかった。しかし、タンジマート時代に入り、近代的な教育行政を整えることで、オスマン帝国の住民の教育を主導していこうという姿勢が見られるようになった。そこで、本節では 1856 年の改革勅令 (Israhat Fermanı) の發布をタンジマート時代の前期・後期の区切れとして、オスマン帝国でどのように教育行政が発展したか検証する。

(a) 教育行政の発展—タンジマート時代前半（改革勅令以前）—

タンジマート時代の教育改革は 1845 年以降、本格的に進められる。1845 年、スルタン・アブデュルメジト (Abdûlmecid 在位 1839-61) は、臣民を無知な状態から救う必要があり、そのためには中等教育や専門学校を作らなければならないという勅令を発した。そして、臨時委員会 (Meclis-i Muvakkat) が召集された。委員会のメンバーには、留学や翻訳局での勤務の経験があり、西欧の言語や文化に通じた人物が選出された。¹⁹そこで提案された内容は、二点あり、一つはコーラン学校を改革することであった。二つ目は、リュシディエ (rüşdiyye) ²⁰を「宗教的制限と時代の要求に調和しながら、科学や技術を学ぶ学校にかえる」ことであった。この提案を受けて、1846 年 6 月、国民教育審議会 (Meclis-i Maârif-i

¹⁸ Somel 2001、29-30 頁

¹⁹ 例えば、士官学校の校長でもあったエミン・パシャ (Emin Paşa) や翻訳局に勤務していたケチェジザーデ・フアト・パシャ (Keçecizade Fuat Paşa) が委員となった。(Ergin 1977、440 頁)

²⁰ リュシディエ (rüşdiyye) : マフムート 2 世の最晩年に構想され設置が決定された世俗の普通教育機関。また、リュシディエの卒業生は、士官、医師、国家官僚を養成する専門的な高等教育機関に入学することも企図されていた。しかし、この構想は、実現しなかった。(佐原 2003、254 頁)

Umûmiyye) が設立される。審議会は、政府の管轄下におかれ、審議会の委員の選出も、政府によって行われた。開明的なオスマン官僚であったサードック・リファト・パシャ (Sadık Rifat Paşa) や外相のレシド・パシャ (Reşid Paşa) らが加わった。以前にはシェイヒュルイスラム (Şeyhülislam) ²¹がオスマン帝国の教育のあらゆる面に影響力を持っていたことを考慮すると、審議会の設立は、教育行政が世俗化へ一歩踏み出したことを示している。²²

国民教育審議会は、初等教育レベルでは、宗教教育や道德教育を重視すること、上級レベルでは宗教教育に加えて実学教育を実施すると述べている。またコーラン学校の監視や、改革を命令し実行する組織の必要を訴えていた。それを受けて、同じ年の 12 月には、もう一つ世俗的な組織として公立学校委員会 (Mekâtib-i Umûmiyye Nezâreti) が設置された。1847 年には、国民教育審議会は「6 歳から 10 歳の 4 年間、子供はコーラン学校へ行くこと、10 歳以上の子供はさらに 2 年間、リュシディエへ行かなければならない。子供を学校へ行かせない親には罰則を与える。」という決定を発表した。また、40 年代から 60 年代の間は、政府はイスタンブールや地方でコーラン学校の拡大を支援し、宗教と道德に関するテキストを貧しい子供に無料で提供した。例えば、クレタ島や西バルカンでも、コーラン学校の普及が図られた。これは、地元ムスリムのイスラムへの信仰の弱まりと、地元の情勢不安を受けて行われたといわれている。また、政府は宗教教育を通じて、イスラムを奉ずるオスマン帝国への忠誠と服従の意識を再構築しようとしていたと考えられている。²³

このようにタンジマート前半期には、教育の重要性が認識され政府内に教育を担当する委員会が設置された。また、リュシディエという世俗の普通教育の導入が図られ、さらにそれまでムスリム・コミュニティによって担われていたコーラン学校への政府の介入が見られるようになった。この時代、政府の教育における役割が大きくなってきたことが分かる。しかし、実際には、コーラン学校に対する改革は進展が見られなかったといわれている。なぜなら、コーラン学校はワクフの管理下にあり、その影響が強く政府がコーラン学校の教育に干渉することは困難であったからである。²⁴

一方、リュシディエの改革や新しいカリキュラムの検討は進んだ。臨時委員会は、学校教育のうち、初等教育をコーラン学校 (Mekâtib-i Sıbyaniye)、中等教育をリュシディエ (Mekâtibi Rüşdiyye)、高等教育を大学 (Darülfünun) として三段階に分けて整備する計画を持っていた。当初、コーラン学校の改革から着手される予定であったが、難航したためリュシディエの改革と大学の設置が進められた。²⁵1874 年までに、18 校のリュシディエ

²¹ シェイヒュルイスラム (Şeyhülislam) : 16 世紀以降に制度化された。様々な問題の法判断をイスラム法にてらして判断するムフティの最高位の職名で、イスタンブールのムフティがこの職を兼ねた。(林 1997、60 頁)

²² Somel 2001、38 頁

²³ Somel 2001、59-60 頁

²⁴ Ergin 1977、443 頁

²⁵ Ergin 1977、443 頁

が建設され、その当時生徒は 1859 名、教師及び職員は 166 名であった。²⁶

リュシディエ改革を進めるために、一つの学校が選ばれ、それを新式のリュシディエとして新しいカリキュラムが導入されることになった。1847 年、ダウトパシャ・メクテビ (Davutpaşa Mektebi) が実験校として選ばれた。ここでは、アラビア語、ペルシア語、算術 (Hesap)、地理学が教えられることになった。そして、生徒たちにはいくつかの科目の最初の部分を短く教え、それらを宮廷で試験させた。この教育方法は、多くの人々に認められ、この形式の学校はさらに 4 校建設された。²⁷1848 年に大宰相府へ提出された文書により具体的な教育内容が紹介されている。まず、子どもたちの精神を鋭くし、自分の素質に失望したり、誤解したりさせないために、第一に子供たちにトルコ語で書かれた科学の本を読ませると述べられている。そして、徐々に進んで知識を理解できる段階で簡単な文章のアラビア語やペルシア語を学ぶことが始められた。また、算術については、足し算や引き算とともに一般の人に充分なレベルの掛け算や割り算の能力を身に付ける。地理分野では、ヨーロッパの国土 (memleket)、海、海峡、湾を覚えさせて空白のある地図にそれらを書いて示せるようにする。アラビア語については文法を学ぶ。ペルシア語の要素 (avamil) も教え、賢人の助言 (nesayihî hükema) が書かれた著作を読む。また、書道についてはスルス書体 (sülûs) が練習された。²⁸

リュシディエの卒業生の多くは、事務職を担う役人になった。一方、軍人養成のための中等教育は、1875 年以降イスタンブールや他の県を中心に、上級の軍人学校に付属する軍事リュシディエ (Askerî Rüşdiye) が開校され始めた。²⁹

以上のようにタンジマート前期の教育改革を概観すると、近代化の要請で実用的な知識の習得の必要性が意識されるようになり、中等教育でのリュシディエについては改革の進展が見られる。しかし、政府がコーラン学校において宗教教育や道徳教育を強化しようとしたこと、または、コーラン学校の財源をワクフに頼っていたためにコーラン学校への政府の干渉が拒否されていたことなどからは、初等教育段階では、伝統的な教育体制が維持されていたことが分かる。また、コーラン学校の宗教的な傾向は、教育改革によって教師の職を失うことを恐れた保守的なウレマー (ulemâ) らによっても強められていった。³⁰コーラン学校での教育を通じて、生徒は宗教的権威に従うことを学び、ムスリム社会の一員であるという意識を身に付けていったといわれている。³¹政府は、そのような人々のムスリム社会への帰属意識をオスマン帝国への忠誠へ高めることへも援用しようとしていたのではないだろうか。また、それまで、ムスリム・コミュニティによって運営されていたコーラン学校へ政府が介入しようとしたことは、改革の結果であり、オスマン帝国の教育の

²⁶ Ergin 1977、448 頁

²⁷ Ergin 1977、444 頁

²⁸ Ergin 1977、445 頁

²⁹ Akyüz 1997、143 頁

³⁰ Somel 2001、61 頁

³¹ 佐原 2003、259 頁

新しい段階といえる。しかし、オスマン帝国は、人々のアイデンティティの根源が第一義的に宗教に由来し、統合と共存のシステムもまた、宗教を基軸としていたといわれている。³² そうだとすると、タンジマート前期に、世俗的な中等教育の整備が進んだとはいえ、初等教育段階でコーラン学校を通じて人々のムスリムとしての意識を高めようとしたことは、それまでのオスマン帝国の統治の路線を逸脱するものではないと考えられる。

(b) 教育改革の完成—タンジマート時代後半（改革勅令以後）—

1856 年、改革勅令(*Islahat Fermanı*)が發布される。改革勅令は、オスマン政府の改革の意思を改めて示すよう西洋諸国から圧力を受けて公布されたもので、その内容はほとんど非ムスリムの権利に関わるものであった。³³ このことは、それ以降の教育政策にも影響を与えていく。1839 年のギュルハーネ勅令ではオスマン帝国臣民の教育に関する記述は見られなかったが、改革勅令では、教育に関する記述が登場している。それは、次のようなものである。第一に、全ての帝国臣民はオスマン帝国の全ての学校に入る機会を持つとされた。第二に、国家の監視の下にあるならば、公的に認められている全ての宗教コミュニティ(*cemaât*)は、独自の学校を作る権利を認めるとされた。その結果、アルメニア、ブルガリア、ギリシアなどで非ムスリムのための学校建設が進んだ。

一方、政府は非ムスリムの教育ネットワークの発達を危惧し、オスマン帝国としての公立学校のシステムを発達させる必要を感じていた。ムスリムと非ムスリムを同じようにオスマン帝国の教育体制の中に取り込んでいこうとする動きが見られる。まず、1856 年には、混合教育委員会(*Meclis-i Muhtelit-i Maârif*)が設立されている。ここには、ムスリムと非ムスリムのそれぞれから代表が選出され、学校のレベルやカリキュラム、教師の選択などを検討し決定する権限が与えられた。また、これと関わって、国民教育審議会はオスマン帝国の教育を三段階に分けて計画した。初等教育(*sıbyân mektepleri*)では、それぞれのコミュニティの言語を使って教えられ、カリキュラムは宗教科目中心でムスリムと非ムスリムは分ける。中等教育(*rüşdiyye*)では、オスマン・トルコ語を使って教え、「文明化や科学」について教える。専門学校のような高等教育では、科学や技術を学ぶのに適した言語が選択される、というものであった。また中等教育と高等教育はムスリムと非ムスリムの混合教育とするとされた。さらに、コーラン学校も含めて全てのコミュニティの初等学校をスブヤーン学校(*sıbyân*)³⁴として分類しようと試みた。

1857 年、国民教育審議会が改編され国民教育省(*Maârif-i Umûmi Nazâreti*)というより権限を強めた教育行政の組織が作られた。国民教育省の目的は、効率的に公立学校を増や

³² 鈴木 2000、145 頁

³³ 新井 2001、56 頁

³⁴ スブヤーン(*sıbyân*)という呼称は以前から存在していた(註 12 参照)。それらは、教育内容から考え、「コーラン学校」と表記してきた。しかし、国民教育審議会の決定からは、*sıbyân* が「コーラン学校」ではなく「初等教育」を指す言葉として使われていることが分かる。よって、本稿では、今後、*sıbyân* や *sıbyân mektebi* はスブヤーン学校と表記する。

すこと、非ムスリムと外国人教育施設を監視することであり、公教育の制度化や管理が目指された。1861年には、オスマン帝国のムスリム、非ムスリムの学校全てを法的な枠組みの中に統合し、国民教育省の管轄下に収めることが図られた。³⁵1864年には、国民教育省の再編が行われ、新たに教育委員会 (Meclis-i Maârif) となった。教育委員会の中には、私立学校局 (Dâire-i Mekâtib-i Mahsûse) と公立学校局 (Dâire-i Mekâtib-i Umûmiyye 後に Dâire-i Maârif-i Umûmiyye) があった。私立学校局は、イスラムやイスラム法について書かれた本の調査を行った。それは、事実上の検閲であり、このことは、かなり激しい政府批判の言論活動が起こり始めたことも影響している。政府は、同じ年にあらゆるオスマン政府への批判を禁止する出版法 (Matbuât Nizâmnâmesi) を発布している。³⁶

1868年には、スブヤーン学校では読み書き能力や数学の知識が十分に身につけることができず、卒業生がリュシディエの入学試験を通過できていないと批判があがった。これを受けて、スブヤーン学校での教師は教育委員会によって選抜されると提案された。教師は、若くて能力があり、一定期間教師養成訓練を受けることが義務付けられた。また、伝統的に教師の給料は週ごとに生徒から徴収されていたが、代わって、政府から決まった月給が払われるようになった。また、同じ年、混合教育の特別中等学校として、リセ³⁷ (Lise, 後に Mekteb-i Sultânî) が設立された。当時、リュシディエの数は増加していたが、さらに上級レベルの学校へ進学できるような生徒の輩出は十分にされていなかった。そこで、西欧諸国で行われているような組織とレベルの教育段階の設置が必要だと考えられた。1867年に、フランス政府からオスマン政府へ、都市でキリスト教徒のための中等教育施設を建設する必要があるという内容の文書が送られ、フランス政府の支援を受けてイスタンブルにフランス語で教育をするリセ (Lise) が建設されることになった。³⁸トルコ人校長 (müdür) とフランス人副校長の下で、教師にはフランス人などの外国人が配された。その後、1869年に発布される国民教育綱領 (Maarif-i Umumiyye Nizamnamesi) において、リセを中等教育の次の段階の教育を担う組織として州都に開校する計画がたてられ、それらはスルタニエ (Sultaniye: スルタンの学校) と呼ばれるようになった。³⁹

ところで国民教育綱領は、初等教育から高等教育までの体系的なシステムを整えることを定めており、これは、教育についての最初の法的な枠組みで、ここでタンジマート時代の教育改革は一応の完成を見たといわれている。国民教育綱領にはスブヤーン学校、リュシディエ、スルタニエにおける具体的な教育内容も定められている。

国民教育綱領によると、スブヤーン学校での教育は、女子が6歳から10歳、男子が7歳から11歳の4年間で、男女は別々に学ぶとされた。また、父母が子供を学校へ通わせることは義務となったが、心身に重大な疾患がある子供や、子供が家計を支えている場合や家

³⁵ Somel 2001、44-45 頁

³⁶ Somel 2001、46 頁

³⁷ フランスのリセ (高等学校) を模してイスタンブルのガラタサライにつくられた。

³⁸ Akyüz1997、145 頁

³⁹ Akyüz1997、146 頁

から学校が遠い場合、家庭で読み書きを学んでいる場合などは、学校へ行くことを免除された。教育内容は、アラビア語のアルファベット (Elifba)、コーラン、コーランの注釈、道徳、イスラムに関する基礎知識 (İlmihal)、作文、数学、オスマン朝の歴史、地理、公共についての知識 (Malûmat-ı Nafia) であった。また、全ての街区や村で少なくとも一つは学校を建設し、ムスリムとキリスト教徒が混在する地域では、別々の学校を建てるとされた。⁴⁰

中等教育であるリュシディエについては、男子校、女子校⁴¹それぞれの教育内容が次のように書かれている。男子リュシディエでは、初歩の宗教的知識 (Mebâdi-i ulûm-i diniye)、オスマン語文法、正書法と作文 (İmlâ ve İnşa)、新しい方法でのアラビア語とペルシア語文法、幾何学の基礎、書き取りの方法、世界の歴史とオスマン朝の歴史、地理、体育、学校の所在地で最も多く使われている言語、貿易の中心地では4年次にフランス語を教える⁴²というプログラムがたてられた。また、女子リュシディエについては、初歩の宗教的知識、オスマン語文法、初歩のアラビア語とペルシア語文法、正書法と作文、文学選集 (Müntehabat-ı edebiye) 家政学、要約した歴史と地理、計算と書き取りの方法を教える。また、強制ではないが、絵画、裁縫、音楽も学ぶとされた。⁴³

スルタニエではリュシディエを卒業後6年間学ぶとされた。3年間ずつ2段階に教育課程が分けられた。前半の3年間は、イダディー (İdadî: リュシディエの上級にあたる学校)⁴⁴と同じ授業が行われた。その内容は、トルコ語の読み書き、フランス語、オスマン帝国の法、論理学、経済の基礎、世界の歴史、自然科学 (動物や植物について)、代数、算術と書き取りの方法、幾何学、測量 (幾何学の一分野)、物理、化学、絵画であった⁴⁵。後半の3年間は、文学 (Edebiyat) と自然科学 (Ulûm/müsbet bilimler) の二つにクラスが分けられていた。文学クラスの授業には、トルコ語の読み書き、アラビア語とペルシア語の文学に関する書物、言語学 (Maanî)⁴⁶、フランス語、経済、諸民族の法 (Hukuk-ı Mîlîl) 歴史があった。自然科学クラスの授業には、幾何学、製図 (Menazır)、代数と代数の幾何への応用、三角法と球形三角法、天文学、物理と化学を要約し工業や農業に応用すること、

⁴⁰ Akyüz1997、142 頁

⁴¹ 1859 年に最初の女子リュシディエが開校された。(Akyüz 1997、144 頁)

⁴² 教育大臣サフフェト・パシャ (Saffet Paşa、在職 1868-1871) により、例えばペイルートやイズミルでフランス語コースの設置が必要だと提案された。当時、貿易拠点に住むムスリムたちは、フランス語教育を受けさせるために子供を外国人学校へ行かせることがあった。(Somel 2001、56 頁)

⁴³ Akyüz 1997、144 頁

⁴⁴ 元は、軍事学校 (Harb Okulu) や軍医学校 (Askerî Tıbbiye) へ入学するための準備クラスで 11 歳から 14 歳の生徒が通っていた。1869 年の国民教育綱領で、ムスリムとキリスト教徒のオスマン臣民を交流させ共通の文化の中で育成するための中等教育の一つとして定められる。(Akyüz 1997、144-145 頁)

⁴⁵ Akyüz1997、145 頁

⁴⁶ アクユズ氏によれば、Maanî は「単語や文法、目的への表現の適切さを主題にする学問」(Akyüz1997、420 頁)

自然科学（動物や植物について）、地形学があった。⁴⁷また、スルタニエでは、学費は生徒から徴収し、学校施設の建設費は宮廷から捻出されることとなった。⁴⁸また、学校への門戸は全てのオスマン帝国臣民に対して開かれるとされたが、生徒のムスリムと非ムスリムの割合は政府が議論し決定された。スルタニエ開校前の1867年の報告書では、600人の生徒のうち半数をムスリム、残り半数を非ムスリムにする予定であるが、現段階ではムスリムの子供は100人も集まっていないので、リセの開校までに生徒を300人まで増やすことが課題であると述べられている。1868年の決定では、入学してくる300人のうち父親が亡くなった宮廷吏員の子供やそれ以外の身分で能力のある子供など半数の生徒の学費を免除する、非ムスリムに関しては75人の学費を免除する、また、収入の程度に応じて学費を全額、半額、4分の1の割合で子供から徴収するとされた。⁴⁹実際の初年度入学者は、ムスリムが147名、グレゴリウス派アルメニア教会信徒が48名、ギリシア正教徒が35名、ユダヤ教徒が34名、ブルガリア正教徒が34名、カソリックが23名、アルメニア・カソリックが23名であった。⁵⁰

このように、国民教育綱領を見ると、初等教育であるスブヤーン学校の教育内容に、宗教教育だけでなく作文や数学や地理などの科目も含まれ、また、中等教育のリュシディエでは、地理や数学に加えてフランス語を教えるとされている。タンジマート以前に主要な教育機関であったコーラン学校やメドレセでは、そのような授業はほとんど行われてなかったといわれている。⁵¹このことから、貿易などに必要となる実用的な知識を身に付けることが意識されるようになっていたことが分かる。新たに開校されたスルタニエにおいては、宗教教育は含まれず、フランス語教育が導入されており、実用的な知識だけでなく西洋の文物を受容する人材の育成にも関心が向けられていたと思われる。

また、数学や地理と同様にそれまで教えられてこなかった「オスマン朝の歴史」がスブヤーン学校でもリュシディエでも扱うとされたことも、大きな特徴であると考えられる。先述したとおり、改革勅令で共同体ごとの学校を建設する権利が認められ、非ムスリムの教育ネットワークが発達したことは政府にとって脅威であった。また、ムスリムと非ムスリムの法的な平等が認められ非ムスリムがオスマン帝国内で台頭していたことは、ムスリムたちの反感を抱かせていた。初等・中等教育で「オスマン朝の歴史」を学ぶことは、ムスリムと非ムスリムが共有できる「オスマン帝国臣民」としての意識を身に付けることにつながり、それによって国内の安定を図ろうとする意図がうかがえる。また、オスマン帝国の支配層は、「オスマン人」としての意識を持っており、そこではオスマン語を話しうることが求められていた。一方、アナトリアなどで話されている素朴なトルコ語は粗野な言

⁴⁷ Akyüz1997、146 頁

⁴⁸ Akyüz1997、146 頁

⁴⁹ Ergin 1977、484 頁

⁵⁰ 佐原 2003、255 頁

⁵¹ Ergin 1977、86 頁

葉として蔑視されていた。⁵²そのため、伝統的なコーラン学校でもトルコ語は教えられてこなかったといわれている。⁵³1847 年のダウトパシャ・メクテビにおけるリュシディエ改革では見られなかったが、国民教育綱領ではリュシディエで、オスマン語の教育が行われることになった。このことも、政府が人々を「オスマン帝国臣民」へと教育しようとしていたことを意味していると考えられる。

以上のように、タンジマート後期のオスマン帝国は、まず、近代化が進んでいなかったコーラン学校もスブヤーン学校として政府の管理下に置き、実学的で世俗的な知識を身に付けられるよう、ムスリム臣民の教育を政府が担っていくという方針が取られた。また、コーラン学校だけでなく非ムスリムのコミュニティの初等学校もスブヤーン学校と分類されるなど、ムスリムと非ムスリムの教育システムが一括して国家の管理下に置かれた。これらのことから、オスマン帝国の様々なエスニシティに属する臣民が共通の利害を意識し、国家に忠誠を誓うことを期待していることが伺える。特に、ムスリムと非ムスリムが同じ学校で同じ教育を受ける混合教育は「オスマン国民」の「融和と和解」のための有効な装置として考えられていた。⁵⁴ゆえに、この時代の教育改革は、実学的な教育の重視や近代的教育行政の整備などの西洋化と、多民族、多宗教を内包するオスマン帝国を前提とするオスマン主義が並存していたと考えられる。

⁵² 鈴木 2000、119-120 頁

⁵³ Ergin 1977、86 頁

⁵⁴ 佐原 2003、255 頁

第2章 新オスマン人の教育観

本章では、タンジマート時代の後期に政府の改革への反対勢力として登場した新オスマン人について取り上げる。新オスマン人らは自ら新聞を発行し、政府批判の論説を発表していた。そこから、彼らの教育観を検証する。ここでは、新オスマン人のうちアリー・スアーヴィ (Ali Suavî, 1839-78)、ナムク・ケマル (Namık Kemal, 1840-88) の教育に関する論説を検証することにする。

1. アリー・スアーヴィ

アリー・スアーヴィは、零細な紙職人の息子であったが、リュシディエを卒業後、陸軍省での勤務、メッカ巡礼、リュシディエでの教師を経験した。さらに、イスタンブールのシェフザーデジャーミー (Şehzade Camii) での説教を行っておりその名を知られていた。1867年に『報道者』(*Muhbir*) を創刊して政府批判を展開した。その中に、「教育」(Ma'arif) と題されたスアーヴィの記事があり、ヒュセイン・チェリッキ氏の『アリー・スアーヴィとその時代』で取り上げられている。そこで、チェリッキ氏の著作に依拠し、スアーヴィの教育観を検証する。

スアーヴィは『報道者』第1号で「個人や社会の幸福のためには文明が必要であり、文明のためには働くことが必要で、その原則 (usûl) にしたがって勤めるために知識 (ilim) すなわち教育が必要である」と述べており教育の重要性を訴えて、⁵⁵メドレセの改革を主張している。メドレセ教育は、宗教の知識以外身につけることができないにもかかわらず、メドレセの卒業生が皆、宗教教師になるわけではなかった。そこでスアーヴィは実用的な学問を学び、職業や産業につながる教育政策が必要だと主張している。しかし、スアーヴィは、メドレセを廃止するという考えではなくメドレセを改革することを主張した。例えば、メドレセでの教育に段階をつけることが提案されている。それは、「第一段階では、トルコ語で教育し幾何学、地理学、天文学、歴史など有益な知識を学ぶ。第二段階では、宗教職に就く者はアラビア語とペルシア語を学び、そうではないものには別の教育を提供する。第三段階では、国家の法 (kanun) がイスラム法 (fikh) にどのように適応するかということ、神学や哲学を研究する専門家が取り扱う。」⁵⁶というものである。さらに彼は、イスラムはキリスト教のように科学を拒否せず積極的に受け入れてきたし、自分自身もメドレセで地理や自然科学や天文学や数学を学んだと述べている。そして、公教育が開始された後、教育が「古い方法」(Usûl-i Atika) と「新しい方法」(Usûl-i Cedide) のように分類されることに異議を唱えている。⁵⁷このことから、スアーヴィは新しい教育制度を導入するのではなく、伝統的なメドレセを通じて、実学的な教育も可能であると考えていたことがわかる。

⁵⁵ Çelik 1994、650 頁

⁵⁶ Çelik 1994、655 頁

⁵⁷ Çelik 1994、656 頁

スアーヴィは、メドレセ以外の学校についても意見を述べている。キリスト教徒の共同体が運営する学校は、政府の監視下にないため、国家にとって有害なことが教育されることがあると危惧している。しかし、それらの学校で西洋の科学を教育し近代化が進められていることは、前向きに評価しながら、ムスリムへはこのような非ムスリムの教育の発展を警告している。そして、政府には、ムスリム住民にも学校を作り自ら運営する権利を与えるよう要求した。⁵⁸

スアーヴィは、ムスリムがメドレセで宗教教育しか受けず、実用的な知識を学ばないことを否定し、教育で近代的な科学を学ぶことを推奨した。しかし、スアーヴィの主張からは、政府の教育改革のように実学を導入することによって、教育を世俗化し、オスマン帝国の多民族、多宗教の臣民の中に共通の利害意識を形成し、国家への忠誠心を高めようとする意図は見られない。スアーヴィは、教育に実学を導入することで、産業が興り人々が職業を持つことにつながり、さらには、文明化がもたらされ人々の幸福が実現すると考えていた。また、スアーヴィは、1866年時点でイスタンブルだけでアルメニア人は新聞を16紙も発行しているのに対し、トルコ人の新聞は8紙しか発行されていないことを指摘し、次のように書いている、「イスタンブルでは、教育や科学の分野で民族の統一はなく、それぞれの言語と意識で進歩をしている。いつの日か、勤勉な民族のうち本当の一つが、進歩をするだろう。私の書いたことから、我々のイスラムの同胞たちも重大さを感じることを期待する。」と述べている。⁵⁹ゆえに、スアーヴィにとって教育とは、人々を啓蒙し個人や社会の幸福を実現する手段であったと考えられる。また、このようにムスリムが啓蒙されることを願っていたことから、新聞を多く発行するなど進歩を続ける非ムスリムへの警戒心もうかがえる。

ところで、スアーヴィは宗教的要素をとてもうまく使って政府批判を行った新オスマン人だと評価されている。また、彼の論説は口語に近い形で書かれており、人々にとって非常に分かりやすく影響も大きかったといわれている。⁶⁰例えば、1868年に『報道者』において、「政治は、純粋なイスラムの法である (Siyaset, mücerret şariat-i İslamiyedir)」と述べ、オスマン朝の衰退の原因として宗教を疎かにしたことを挙げている。⁶¹新オスマン人らは、政府批判の論説を発表したために国外追放の制裁を受け、活動の場をヨーロッパに移していた。スアーヴィの『報道者』も政府の弾圧を受け、1867年からはロンドンで『報道者』を復刊していた。新オスマン人らは国外から政府批判の論説を発表し続けることができたが、国内の民衆に自分たちの主張を浸透させるためには、いまひとつ国内の民衆と新オスマン人らを結び付ける要素を示す必要があったといわれている。そこで、宗教が社会のあらゆる組織に関わっているオスマン帝国においては、宗教的感覚や方法に訴えるこ

⁵⁸ Çelik 1994、657-658 頁

⁵⁹ Çelik 1994、658 頁

⁶⁰ Türköne 1991、78-79 頁

⁶¹ Türköne 1991、93-94 頁

とで民衆の賛同を得られると考えられた。『報道者』や『自由』(*Hürriyet*)⁶²でも新オスマン人たちはウレマーについて多くの記事を書く努力をしていた。⁶³これらのことから、スーヴィが伝統的なメドレセ教育を維持し、メドレセに実学的な教育の導入を訴える主張は、オスマン帝国の住民のうち大多数を占めるムスリムの関心を自分の政府批判の運動に向けさせるためのものであったとも考えられる。

2. ナームク・ケマル

ナームク・ケマルは、スルタンの侍従の祖父や宮廷付き筆頭天文学者の父を持つエリートの家系に生まれ、翻訳局に勤務した経験を持つ。ケマルはイブラヒム・シナーシィ(*İbrahim Şinasi*, 1826-71)⁶⁴の感化を受け『世論の叙述』に様々な論説を発表し、政府の現状を批判した。政府批判の言論活動のために首都から遠ざけられる制裁を受け、1867年パリへ亡命した後、ロンドンへ移り、『自由』を発行した。オスマン帝国へ帰国後の1872年には『警告』(*İbret*)を発行した。ナームク・ケマルは新オスマン人の中でも最も影響力があった代表的な論客として知られており、オスマン帝国における教育問題についても議論し、人々の文化水準の向上を目指していたといわれている。⁶⁵

ナームク・ケマルの教育観を知るために、1872年に彼が、『警告』第16号に書いた「教育」(*Maarif*)という論説を参照する。ここで、ケマルは、「(オスマン帝国と対比して)ヨーロッパでは、我々が着た服、使った時計、書き物をした紙、海で見た汽船、陸で乗った路面電車や鉄道⁶⁶が教育の進歩のレヴェルを即座にあらわしている。」⁶⁷また「知ってのとおり、文明のある国では女性も男性と同じように教育を受ける。」⁶⁸と述べ、ヨーロッパ諸国の発展の要因は教育にあるという考えを示している。ケマルをはじめとして新オスマン人らは、ヨーロッパの進歩を論じ、専制政治を廃し、祖国愛をもった国民の自由な意思による立憲政を実現させてヨーロッパ諸国と同じレヴェルにまで進歩することを目指していた。しかし、「立憲政」(*meşrutiyet*)や「自由」(*hürriyet*)などの言葉は新オスマン人らの言論活動によってオスマン・トルコ語の中に定着した新しい概念であった。⁶⁹そうだとすると、立憲政を実現するためには、人々を啓蒙し立憲政の担い手であるという意識を人々の中に育てる必要があっただろう。また、ケマルは、教育によって全ての人に義務と権利を知ら

⁶² 『自由』(*Hürriyet*) : 1868年、ロンドンでナームク・ケマルとズィヤ・パシヤが創刊した。

⁶³ Türköne 1991、78頁

⁶⁴ 『諸情勢の翻訳者』(*Tercüman-ı Ahval*, 1859年創刊)や『世論の叙述』(*Tasvir-i Efkar*, 1862年創刊)を発行し啓蒙思想を広め、若いオスマン人たちに影響を与えた。

⁶⁵ Akyüz 1997、171頁

⁶⁶ ナームク・ケマル自身のヨーロッパ滞在経験を指していると考えられる。

⁶⁷ Kaplan 1978、235頁

⁶⁸ Kaplan 1978、236頁

⁶⁹ 新井 2001、80頁

せることができ自由が完成すると考えていた。⁷⁰このことから、ケマルは単に、ヨーロッパ諸国の技術を導入するためというだけでなく、人々を啓蒙していくためにも教育が有効であると感じていたと思われる。

同じ『警告』第 16 号「教育」(Maarif) に、ヨーロッパやアメリカの教育の状況が書かれている。「ヨーロッパやアメリカの多くの地域で教育は強制である。しかし、次のことが明らかである。強制教育の法律を受け入れている地域のほとんどで、子供に教育を受けさせるために大人を強制する必要はめったにない。大部分の人が家計のために記しているノートを見ると、飲食、外出、住居のような必要なものに費やすお金がいくらであっても、新聞や本や学校のための費用は、それと同じくらいかそれより多い。そのような父、母の子供が同年代の子供と比べて学校へそれほど一生懸命に、賢く行くのを見ると、彼の教育への関心 (heves-i tahsili) は父親の礼儀正しい笑みから学び取り、知識への嗜好は母親の情け深い胸から得ていると思われる。」⁷¹この記述を見ると、ケマルは、ヨーロッパやアメリカの父母は教育に多くの費用をかけていて、その子供も積極的に教育を受けるようになっていると評価していたと分かる。一方、オスマン帝国の状況については、彼の考えによれば、子供たちが教育を受けられない、あるいは、劣悪な教育環境にあるのは保守的な教師や無知な母親に責任があるとされた。さらに、無知な母親は子供を無知にする。また、無知な女性たちというのは簡単に道徳から外れた行いをしており、それを見た男性たちは結婚する意欲をなくし、人口の減少を招くと考えていた。このため、女性と女兒に適切な教育を受けさせる必要があると主張していた。⁷²また、ケマルは、大学 (Darülfünûn) や教師養成学校 (Darülmua'llimîn) などを作ることと、全ての村に学校を設置すること、そして全ての人に教育を受けさせるような大きな発展は後回しにして、まずイスタンブルで初等学校や中等学校を設置することを提案した。父母については、子供が学校で手紙の読み書きや家業に関わることを学んできたり、学校を出て政府機関や他の職業に就き充分お金を稼いだりするのを見たら教育に関心を示すようになると考えている。⁷³このように、ケマルは、オスマン帝国においては、人々を無知な状態から救うために教育が整備されなければならないと考え、さらに人々の教育への関心を高めなくてはならないといっている。つまり、教育を通じて、人々を啓蒙するという意図が伺える。

また、新オスマン人らは、国の政治が圧政から立憲政に代われば、人々は祖国を愛するようになり、帝国の全ての住民はオスマン人であることを、誇りを持って受け入れるはずであると考えていた。ケマルも、『警告』第 14 号 (1872 年) の「諸民族の融合」(İmtizâc-i Akvâm) という論説で「オスマン帝国は、諸権利において互いに平等で、利益において互いに共通する。しかし、言語と民族 (cinsiyet) とそして思想において互いに相反する多く

⁷⁰ Akyüz 1997、171 頁

⁷¹ Kaplan 1978、236 頁

⁷² Akyüz 1997、172 頁

⁷³ Kaplan 1978、237-238 頁

の成員の集まりから作られた社会」⁷⁴であり、「一つの名を持って元々の臣民の調和の状況から離れた小さな小さな民族のうちいくつが生き残ったか。生き残ったもののうちどれが幸福を見つけたか。」⁷⁵と述べ、多様な民族もオスマン帝国の下では一体であるべきだと考えていた。また、「我々は祖国の中で諸権利の点で平等、利益において共通であるのにもかかわらず、言語と宗教的意見を理由としてどうしてバラバラになることを望むだろうか」⁷⁶、「アラブは例外として、一つの別個の社会を組織するのに十分なほどの一つの言語を話し、それを一つの民族とみなす一人々は領土のどこに存在するのか。ここにいる民族は、今、闘争の原因の形で示されることを望まれている言語、民族、宗教を今日までオスマン帝国のお陰で保護できたこと、将来もそのお陰で保護できることを気付くことができないのか。」⁷⁷と述べ、言語、宗教、民族を理由として、諸民族がオスマン帝国から分離することを認めていない。

ケマルは、多民族多宗教の人々の融合を実現するために、教育が有効であると主張していた。同じ論説の中で「融合は、人間の頭の中で友愛によって作られる。(それは) 子供のとき、特に学校で作られる。今、その融合のために私たちに必要なことは、あらゆる民族、あらゆる宗教の子供を受け入れる学校を作る努力をすることである」、また、「(オスマン帝国の) 子供たちがいろいろな学校を卒業させられるとしよう。そのときには、彼らの関係を仲たがいすることは不可能である。ちょうど、若木のときにお互いに絡まった二本の木が成長したあとに分けることは、二本の木を突然根っこから抜くことよりも難しいように」⁷⁸と述べている。このように、学校教育を通じて、多民族多宗教の人々の間にオスマン帝国の国民としての意識が形成されると考えていたのである。

しかし、このケマルの「諸民族の融合」の思想は、非ムスリムを排除した「ムスリムの国民国家」の形成へと向かうことになる。ケマルは、「シャリーアの法の施行で、たぶんヨーロッパよりももっと整った法が作られうる」と述べており、⁷⁹オスマン帝国はイスラムを基軸にシャリーアに基づいた国家であるべきだという立場をとっていた。1856年にムスリムと非ムスリムの平等を強調した改革勅令が發布されると、政府の方針はシャリーアに反するとして批判した。なぜなら、オスマン帝国においては、シャリーアによってムスリムは支配民族 (*millet-i hâkime*)、キリスト教徒など非ムスリムは被支配民族 (*millet-i mahkûme*) という構図が成立しており、非ムスリムがムスリムと同様の権利を与えられたことは、その規則に対立するものだったからである。⁸⁰したがって、ケマルは、宗教、民族、言語を問わずにオスマン帝国の全住民をオスマン国民として融合することと、ムスリムと

⁷⁴ Kaplan 1978、213 頁

⁷⁵ Kaplan 1978、215 頁

⁷⁶ Kaplan 1978、214 頁

⁷⁷ Kaplan 1978、215 頁

⁷⁸ Kaplan 1978、216 頁

⁷⁹ Türköne 1991、74 頁

⁸⁰ Türköne 1991、61-63 頁

非ムスリムの平等を批判することという矛盾する二つの主張をすることになってしまったのである。当然、これらが両立することは難しく、結局、非ムスリムを排除したオスマン国民を作り出そうと考えざるをえなかったといわれている。⁸¹

タンジマートの後期に、民衆の用いる言葉と政府の公用語や文学用語との間に大きな断絶があり、民衆が政府の事業や知識人の言動を理解できないためにオスマン帝国の専制政治の存続を許しているとして、オスマン語のアラビア文字を廃し、ラテン文字を採用しようとする文字改革の動きがあった。⁸²しかし、ケマルは、アラビア文字を擁護しておりラテン文字の採用に強く反対していた。また、オスマン帝国の公用語としてのオスマン語の価値を非常に重んじていたといわれている。さらに、「言葉はひとつの民族が一民族としてあるために、おそらく宗教よりさえも力のある支えなのである」と述べている。⁸³また、1878年に書かれた私信の中で、オスマン帝国の教育制度がより整備されるならば、アルバニア語など、非トルコ系のムスリム住民が話すトルコ語以外の言語が今後 20 年ほどで忘れ去られるはずだと述べている。しかし、同時にケマルは、このようなオスマン帝国住民の均質化がギリシア人やブルガリア人、すなわちキリスト教徒には行えないと考えていた。⁸⁴なぜなら、オスマン帝国の存立を望んだ時に非トルコ系であってもムスリムであるのならばイスラムの絆によりつなぎとめうる、という考えを持っていたからである。このように、ケマルは、教育によって諸民族の融合を目指していたが、その内実は、オスマン・トルコ語を理解する均質なムスリム住民の形成であったことがわかる。

⁸¹ 新井 2001、81・82 頁

⁸² 新井 1977、48 頁

⁸³ 新井 1977、50 頁

⁸⁴ 新井 2001、82 頁

終わりに

本稿では、教育改革を検証することを通してタンジマート時代のオスマン帝国において目指された近代化の実体を明らかにすることを試みた。そのために、第 1 章ではオスマン政府による教育改革の検証、第 2 章では新オスマン人の教育観を検証した。

オスマン帝国での教育の近代化は、タンジマート以前のマフムート 2 世の時代から見られる。しかし、それらは近代的な軍隊を支える人材養成のための学校の創設が中心で、オスマン帝国で大多数を占めるムスリム住民にとって教育の機会はコーラン学校に限られていた。タンジマート時代に入り、1845 年以降、教育改革が本格的に進む。改革による大きな成果のひとつは、それまで、政府がオスマン帝国の住民の教育を主導しようとする積極的な姿勢は見られなかったのに対し、タンジマート時代には、国民教育審議会やこれを改編し権限を強化した国民教育省などが設置され、政府が住民の教育を担っていくという体制が整えられたことであろう。これは、タンジマート時代の改革路線である中央集権化に沿ったものであると考えられる。

タンジマート時代の前半には、中等教育で世俗的な知識の導入が始まっていたが、初等教育にあたるコーラン学校では逆に宗教教育の強化が図られていた。一方、教育改革によって職を失うことを恐れる保守的なウレマーらによってもコーラン学校の宗教的な傾向は強められており、伝統的な教育体制は維持されていた。また、宗教教育を通じて、イスラムを奉ずるオスマン帝国への忠誠と服従の意識を再構築しようとしていたといわれている。このことから、この時代のオスマン帝国においては、様々な分野で近代化政策が進められようとしていたが、人々のアイデンティティの根源が第一次的に宗教に由来し、統合と共存のシステムもまた、宗教を基軸とする、従来のオスマン帝国の体制を踏襲しながら教育改革がすすめられたと考えられる。しかし、タンジマート時代後半の政府の教育改革からは、宗教的アイデンティティを基礎とした統治から、様々な民族や宗教を内包するオスマン帝国を前提とするオスマン主義を徹底させようという意図がうかがえる。中等教育以上ではムスリムと非ムスリムの混合教育が謳われたり、オスマン語教育やオスマン朝の歴史を教えるとされたことが、そのよい例だと考えられる。

タンジマート改革への反対勢力として現れた新オスマン人については、アリー・スアーヴィとナームク・ケマルを取り上げた。この二人の教育観において共通しているのは、教育は人々を啓蒙する手段として有効だと考えている点だ。新オスマン人らがヨーロッパから取り入れた思想の多くは、オスマン帝国の思想や伝統においては対応するものがなかった。また、ヨーロッパにおける自由と民主主義を求めてきた闘争は、長い歴史的な発展と哲学的積み重ねの結果として 19 世紀に成熟したものであり、新オスマン人らは、そのような発展を自らの社会では見出せなかった。⁸⁵新オスマン人らは、このようなヨーロッパ諸国とオスマン帝国の隔たりを自覚しており、教育によって人々を啓蒙する必要性を主張していたと考えられる。

⁸⁵ Türköne 1991、96 頁

しかし、新オスマン人は、自由な立憲政を追求しただけでなく、衰退と解体の危機にあるオスマン帝国を救うことをも自らの使命とした「オスマン人啓蒙家」とであると評価されている⁸⁶ことも見逃せない。彼らは、オスマン帝国を救うためには、教育から政治組織まで根本的な改革を行い帝国を強くすることと、国家が支配する多様な人々を水平な絆の原則によって一つにまとめるような政治的な同胞意識（*uhuvvet-i siyasiye*）を形成することが必要だと考えていたといわれている。⁸⁷新オスマン人らが、この政治的な同胞意識を実現するために依拠する原則（*nokta-i istinat*）には、二種類のものがあつた。「オスマン国民」としての意識と「イスラムの民」としての意識である。⁸⁸新オスマン人らは、これら両方を主張していたといわれているが、先述したとおり、この二つの原則を両立しようとする矛盾が生じる。このような主張が行われた理由の一つとして、思想が先立って形成され、政治実践が欠如していたことが挙げられている。そのため、「オスマン国民」としての意識と「イスラムの民」としての意識の両方に依拠して政治的な同胞意識を形成することは困難な理論であると考えられなかったようである。⁸⁹

各人の主張を見てみると、人々を啓蒙し立憲政への支持を集めるために、スアーヴィは、伝統的なメドレセ教育を維持し、メドレセに実学的な教育を導入することを訴えていた。また、非ムスリム住民の教育が発展していることを警告して、ムスリム住民が勤勉になり進歩することを願っていた。このことから、スアーヴィは非ムスリムの存在に危機感を持っていたことがうかがえる。ケマルは、「諸民族の融合」という論稿で教育を通じて多民族多宗教の人々の融合が可能であると述べていた。しかし、ケマルは後に、ムスリムと非ムスリムの平等批判と帝国内に住む全ての住民が祖国を愛するオスマン国民になりうるといふ主張の矛盾を解消するために、非ムスリムを排除することで均質なオスマン国民を形成しようとするに至った。そして、そのためにオスマン語の教育を重視していた。

このようにスアーヴィとケマルの主張は、前者がメドレセ教育を維持すること、後者はオスマン語教育によって均質なオスマン国民を作り出そうとしており、異なっているように見える。しかし、これらのことから、彼らがヨーロッパ諸国のような進歩と立憲政の実現を目指していたときに、シャリーアに基づくイスラム国家として存続してきたオスマン帝国の中で、世俗的でもあるヨーロッパの制度を如何に大多数のムスリム住民に受け入れさせていくかということが大きな課題であつたことがうかがえる。

タンジマート時代は、一般に、西欧諸国によるオスマン帝国の改革への圧力に対応する形で近代化政策が推進された時代だといわれている。しかし、政府によって行われた教育改革を見ると、「イスラム国家」としての大枠から逸脱させない方針で改革が進められ、後半期に入ると、オスマン主義の理念に基づく教育改革が進められた。また、アリー・スア

⁸⁶ Türköne 1991、96 頁

⁸⁷ Türköne 1991、96-97 頁

⁸⁸ Türköne 1991、97 頁

⁸⁹ Türköne 1991、97 頁 例えば、民族ごとに集まるという要求も、イスラムの思想から根拠を集めれば、理論上、認めることができるとされた。

ーヴィやナームク・ケマルの教育観を追ってみると、彼らは、西洋化と従来のオスマン帝国の体制の均衡を如何にとるかという問題を持っていたことがうかがえた。ここで、政府の教育改革とスアーヴィやケマルの教育観の関係を考察してみると、両者の理念は相反していたわけではなかったと思われる。例えば、スアーヴィが非ムスリム住民の台頭を脅威と感じ、ムスリム住民を啓蒙するためにメドレセ教育の改革を訴えたことは、イスラム国家としての枠組みに沿うといえる。また、ケマルが諸民族の融合を目指し、「あらゆる民族、あらゆる宗教の子供を受け入れる学校を作る努力をする」という主張はオスマン主義に基づくものといえる。さらに、この主張が変わり、「オスマン・トルコ語を理解する均質なムスリム住民の形成」を目指したことは、オスマン主義の徹底を実現させるために、その目標を具体的に述べたものと考えることができる。新オスマン人は、立憲政の実現を目指しタンジマート改革を批判する勢力として登場した。しかし、彼らの教育についての議論は、結果的に、タンジマート時代後半に見られる政府のオスマン主義に基づく教育改革の理念に具体性を与えることになったと考えられる。

最後に、タンジマート時代がその後のオスマン帝国の変革に与えた道筋としては、オスマン帝国が雑多な構成要素からなる「イスラム国家」からムスリムの「国民国家」に転身しようとしていたことがいえる。⁹⁰タンジマート時代の後半になり、政府はオスマン主義に基づき中央集権化を進め、一人一人の住民を把握してその教育にも責任を持とうという方向を選択するに至った。一方で新オスマン人らは、西洋のように進歩し立憲政を実現するためにオスマン帝国の伝統や大多数のムスリム住民の存在を無視することはできなかった。その結果、ムスリムによる均質な国家の形成が目指されることとなったと考えられる。

(終)

⁹⁰ 新井 2001、82 頁

参考文献一覧

- 新井 2001 : 新井政美『トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ』みすず書房
- 新井 1977 : 新井政美「ナムク・ケマルをめぐる二・三の問題点」『史学雑誌』86 編 4 号
- 佐原 2003 : 佐原徹哉『近代バルカン都市社会史 多元主義空間における宗教とエスニシティ』刀水書房
- 鈴木 2000 : 鈴木董『オスマン帝国の解体—文化世界と国民国家』ちくま新書
- 永田 2002 : 永田雄三「オスマン帝国の改革」永田編『西アジア史Ⅱ』、山川出版社
- 林 1997 : 林佳世子『オスマン帝国の時代』山川出版社
- Akyüz 1997 : Yahya Akyüz. *Türk Eğitim Tarihi (Başlangıçtan 1997'ye)6th ed.* (İstanbul;İstanbul Kültür Üniversitesi Yayınları)
- Çelik 1994 : Hüseyin Çelik. *Ali Suavî ve Dönemi.*(İstanbul;İletişim Yayıncılık)
- Ergin 1977 : Osman Ergin. *Türk Maarif Tarihi·vols.1-2* (İstanbul:Eser Matbaası)
- Somel 2001 : Selçuk Akşin Somel. *The Modernization of Public Education in the Ottoman Empire 1839-1908* (Leiden; Boston; Köln:Brill)
- Türköne 1991 : Mümtaz'er Türköne. *İslâmcılığın Doğuşu* (İstanbul;İletişim Yayınları)
- Kaplan 1978 : Mehmet Kaplan. İnci Enginün. Birol Emil . *Yeni Türk Edebiyatı Antolojisi II 1865 - 1876*(İstanbul ; İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Matbaası, 1978)